



発行:墨田区(スポーツ・学習課)
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6309 FAX 03-5608-6934
✉sportsgakusyu@city.sumida.lg.jp



—墨田で新たな歴史を刻む— たばこと塩の博物館

■たば塩、墨田へ

たばこと塩の博物館は、嗜好品である「たばこ」と必需品である「塩」の歴史と文化を伝えることをコンセプトに、1978年11月3日に渋谷・公園通りで誕生、活動してきました。

「たば塩」の愛称でも親しまれる当館がここ墨田区に移転・リニューアルオープンしたのは2015年4月25日のこと。墨田のたば塩は、渋谷で開館したときのコンセプトを継承しながら、約2倍となったスペースを生かして、35年間で蓄積してきた研究成果、収蔵資料をできるかぎり反映・展示した常設展をはじめ、図書閲覧室やワークシヨップルーム、多目的スペースなど、来館者のさまざまなニーズに応える施設が加わったことが特徴です。



■たば塩と墨田

当館の所在する墨田区横川は、昭和初期に専売のたばこ製造工場が設立された土地であり、日本のたばこ産業にゆかりのある地域です。また、近隣の小名木川は、市川の行徳から江戸城下に塩を運ぶことを目的に開削された運河です。

江戸時代に目を移せば、江戸の中心に近かった墨田界隈は、花見や花火鑑賞など行楽のスポットであり、多くの浮世絵の画題となりました。当館が所蔵する約1800点の浮世絵の中にも広重や国芳などが当時の墨田界隈の様子を描いたものが含まれ、特別展や常設展の一部コーナーに登場することもあります。

さらに、企業博物館が多く存在するのも墨田区の特徴です。郵政博物館、花王ミュージアム、東武博物館、セイコーミュージアムそして当館は、昨年、すみだ企業博物館連携協議会を発足しました。「すみだ5つの博物館めぐり」と題して、見学モデルコースの提案など、生活に密着したものを扱う5つの博物館を楽しんでいただけるよう活動しています。



昨年1月に開催した、隅田川をめぐる文化と産業をテーマにした特別展

■40周年を迎えるたば塩

「たばこ」の常設展示は、『たばこ文化の発生と伝播』『世界のたばこ文化』『江戸時代のたばこ文化』『近現代のたばこ文化』で構成されています。一方、「塩」は、『生命をささえる塩』を導入に、『世界の塩資源』『日本の塩づくり』『塩のサイエンス』という構成です。喫煙具やパッケージ、塩の標本といった実物資料、各種再現展示や模型のほか、充実した映像資料で楽しみながら身近なものの歴史と文化に触れていただけます。

年に6回ほど開催する特別展も当館の大きな特徴です。当館では、世界史、日本近世史、日本近現代史、塩の文化史・製塩技術史を専門とする学芸員7人を擁しており、学芸員の調査研究を生かした「たば塩ならではの特別展は、外部からも高い評価をいただいでい

ます。一方、開館以来継続してきたイベントもあります。「夏休み塩の学習室」は、今年で38回目を迎える企画です。小・中学生のときに参加した方が大人になってお子さんと来館、学習室の思い出を話してくださることもあります。今年も7月21日から開催しますので、ぜひお出かけください。

来年で40周年を迎えるたば塩ですが、墨田ではまだ歩き始めたばかりです。これから様々な活動の中で、みなさまとのつながりによって墨田の地に根を張っていきたくと思っています。

たばこと塩の博物館
広報担当主任 巖地由美子

たばこと塩の博物館 ご利用案内

【開館時間】 10:00~18:00 (入館は17:30まで)
【休館日】 月曜日(ただし、祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)
【入館料】 大人100円、小中高校生50円
(※特別展によって別料金の場合あり)
【所在地】 墨田区横川11-16-3 【電話】 03-3622-8801

特別展情報

第38回夏休み塩の学習室「世界 塩さんぽ」
平成29年7月21日(金)~8月27日(日)

両国・回向院と相撲

安藤 優一郎(歴史家・文学博士)

両国は相撲のイメージが強い街ですが、その源を辿ると今も両国の地に立つ回向院境内に求められます。江戸時代は、回向院境内が相撲の定打ちの興行場所だったからです。今回の講演では、両国の回向院と相撲の深いゆかりを解き明かしました。

回向院が創建されたきっかけは明暦3年(1657)1月18日に起きた明暦の大火です。強い北西の季節風に煽られた火から逃れようと、人々は江戸の東を流れる隅田川に向かいますが、橋が架かっていなかったため逃げ場を失い、溺死する者が続出します。

そうした教訓から隅田川に両国橋が架橋されることになりましたが、明暦の大火の被害者を慰霊するため、幕府は本所牛島新田の地(五〇間四方)で追善法要を執行します。これが回向院のはじまりでした。後に境内が増地され、4000坪余にも達します。

架橋された両国橋のもとに設けられた広小路は本来、橋の焼失を防ぐための広場でしたが、やがて数多くの商人たちが出店する江戸有数の盛り場に変身します。こうして、両国は江戸の繁華街の代名詞となりますが、そうした事情

は隣接する回向院境内も同じでした。

この時代、寺院の境内は回向院に限らず、飲食店や見世物小屋などが立ち並ぶ盛り場と化することが珍しくありませんでした。富くじの興行場所や地方寺院の出開帳の会場としても使用されましたが、回向院の場合、相撲の興行地としての顔も持っていました。

当時、江戸での相撲は興行日数が晴天10日で、深川の富岡八幡蔵前八幡、芝神明社、そして回向院を会場としましたが、天保4年(1833)以降は回向院が定打ちの興行場所となります。それだけ、集客が期待できた立地環境だったわけです。

回向院境内に設けられた相撲小屋の規模は360坪でした。客席は二層の棧敷席(1200人収容)と土俵周囲の土間席から構成されており、大入り満員ならば数千人を収容できたでしょう。

当時、諸大名は人気と実力を兼備する力士を抱えるのが習いでした。諸大名は回向院に家臣を派遣して観戦させ、早馬でお抱えの力士の勝敗を江戸屋敷まで注進させるほどでした。諸大名の熱中ぶりが窺えます。

相撲興行中の賑わいについて、

儒学者で随筆家の寺門静軒は天保年間(1830-1844)に刊行した『江戸繁昌記』で次のように語っています。「相撲、江戸三座(中村・市村・森田座)の芝居、吉原にまさる繁栄はない。」1日に1000両落ちると称された日本橋の芝居街や吉原と並び称されるほどの賑わいでした。

そして、回向院境内で落ちたのは入場料だけではありません。興行場所内外での飲食代も相当なものでした。相撲観戦に人々が押し寄せることで、回向院のみならず両国橋広小路の賑わいも増し、両国地域がさらに活性化して光景が浮かんできます。

明治に入った後も、回向院境内で相撲は興行されていましたが、明治42年(1909)に旧両国国技館が建設されます。戦後、国技館は蔵前に建設されることになったため、両国との由緒がいったん切れます。旧国技館は日本大学に売却されて日大講堂となりますが、老朽

化により解体されます。跡地には「両国シティコア」が建設され現在に至ります。

一方、昭和59年(1984)に蔵前国技館は閉館となります。現在地に両国国技館が建設され、翌60年(1985)より本場所が開催されます。こうして、両国と相撲の縁が再び復活したのです。



『両国大相撲繁栄之図』(嘉永6年) (すみだ郷土文化資料館蔵)